

報告書名：摂食・嚥下リハビリテーションに関する歯科医教育の検討

研究者名：才藤栄一¹⁾、馬場 尊¹⁾、鈴木美保¹⁾、藤井 航¹⁾、小野木啓子¹⁾、加藤友久²⁾

所 属：¹⁾藤田保健衛生大学医学部リハビリテーション医学講座

²⁾愛知県歯科医師会

目的：平成13年度本研究事業において摂食・嚥下障害への対応に関する歯科医師への教育プログラムを作成し実行した。今回の研究では、そのプログラムをさらに精緻化し、摂食・嚥下リハビリテーションチームのリーダーとしての歯科医師を育てるプログラムを構築することを目的とした。

方法：藤田保健衛生大学医学部リハビリテーション医学講座において、摂食・嚥下リハビリテーションに関し長期研修を行った歯科医(5名)に対し調査を行う。長期研修で得られた知識・技能の再確認と実際の歯科診療場面での応用範囲を調査、あるいは回答者のこのプログラムに関する意見を収集し、教育・実習項目の重要度順を検討した。また、中部摂食・嚥下リハビリテーションセミナーアドバンストコースの実施記録を見直し、上記のアンケートを十分に考慮して、実習・教育プログラムを作成した。

結果と考察：中部摂食・嚥下リハビリテーションセミナーアドバンストコースのアンケート記録は実習そのものの評価は高いが、実際の臨床に応用する場合の不安を表すものであった。これまでの実習指導者の意見を総括すると嚥下造影や、内視鏡は歯科医師には現実的ではなく、その重要性を示す必要はあるが、歯科医師の可能な範囲を明確化しその知識と手技を具体的に示すべきであるであった。以上より、セミナーの改善項目として；1)参加者の選抜を適正に行う。2)参加者のレベルにあった症例を選択する。3)嚥下造影・内視鏡検査は総論的な解説や正常例での試行にとどめ、実際の症例は見学あるいはビデオ供覧とする。4)嚥下造影・内視鏡検査を用いない評価方法とその範囲での訓練方法を話題の中心とする。を挙げ、5週内に5日間のプログラムを作成した。

特徴は、症例選択の方法である。症例は一部参加者が持参する方式を試みる。日常の臨床から経験中の摂食・嚥下障害例を供覧させ、そこに指導者が助言を加えていく方式をとる。もう一つの特徴はグループワーク方式(各症例グループ内で供覧しあい参加者どうしで協議しあう)を試みることである。お互いの症例を解説しあう過程で摂食・嚥下リハビリテーションの理解を深めるねらいである。スケジュールの大枠は以下の通りである。

第1日は診察・評価に必要な知識と技能を伝達する。具体的には一般診察方法と嚥下造影・内視鏡検査を用いない評価方法、リスク管理である。第2日は指導者側で用意した入院を診察・評価する。これらで得たものを各自持ち帰り、各自であらかじめ用意した症例に診断・評価を試み、その結果をまとめ次回に報告する。第3日は各自の症例検討と間接訓練計画を行う。間接訓練などの実習も行い、持ち帰って各自の症例に施行する。その結果をまとめ次回に報告する。第4日は各自の症例の再検討を行う。診察、訓練の知識・手技の再確認を行う。最終日各グループに新しい症例を与え、診察・評価・訓練までの一連を実行し、習熟度の確認を行う。以上の流れを軸に、必要な講義を組み込んだ計画である。以上の計画は平成16年秋に実施予定である。実施後は参加者の追跡調査を行い、妥当性を再検討したい。